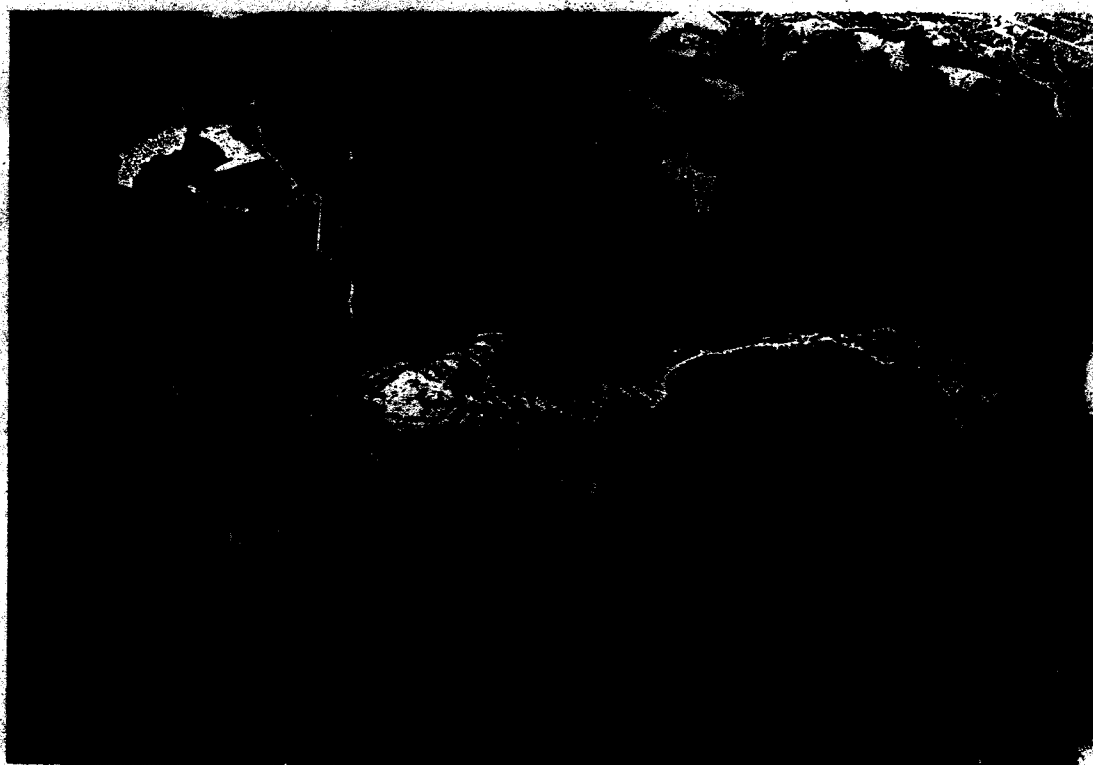


3月バス例会

夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ

—もう一つ里の津山に会いに行く—



(表紙は神楽尾城航空写真)

主催 備前史探訪の会 担当 歴史民俗研究部会
講師 平田恵彦 平成12年3月5日(日)実施

「夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ」旅程

福山駅南口集合	7:45
福山駅南口出発	7:50
福山東IC着	8:05
岡山JC着	8:35
高梁SA着	9:00 (トイレ休憩)
高梁SA発	9:15
北房JC着	9:25
院庄IC着	9:45
神楽尾公園・神楽尾城跡下着	10:05 (バスはここで待機)
神楽尾公園着	10:15 (トイレ休憩)
神楽尾公園発	10:30
神楽尾城跡二の丸着	10:50
神楽尾城跡本丸・三の丸下着	11:00 (見学・昼食)
神楽尾城跡本丸・三の丸下発	12:20
神楽尾公園着	12:45 (トイレ休憩)
神楽尾公園発	13:00
神楽尾公園下着・発	13:10
中之町バス停着 (町並み散策)	13:25 (バスは観光駐車場へ)
観光駐車場着発	14:25
徳守神社着 (坪井町でバス下車後徒歩)	14:45 (バスは指定場所待機)
徳守神社発 (以下本郷まで徒歩移動)	15:00 (トイレあり)
成道寺着	15:05
成道寺着	15:15
泰安寺着	15:20 (トイレあり)
泰安寺発	15:45
本源寺着	15:55
本源寺発	16:15
小田中バス待機場所着・発	16:25
院庄IC着 (中国自動車道)	16:35
北房JC着	17:55
高梁SA着	17:05
高梁SA発	17:20
岡山JC着	17:45
福山東IC着	18:15
福山駅南口着	18:30

★神楽尾城跡（かぐらおじょうあと）

中世美作国苫田郡内にあった山城。現在の津山市総社神楽尾山にある。吉井川北岸にあり、津山盆地中央部を制する要衝で、城下に南麓に戸川宿が成立していた。

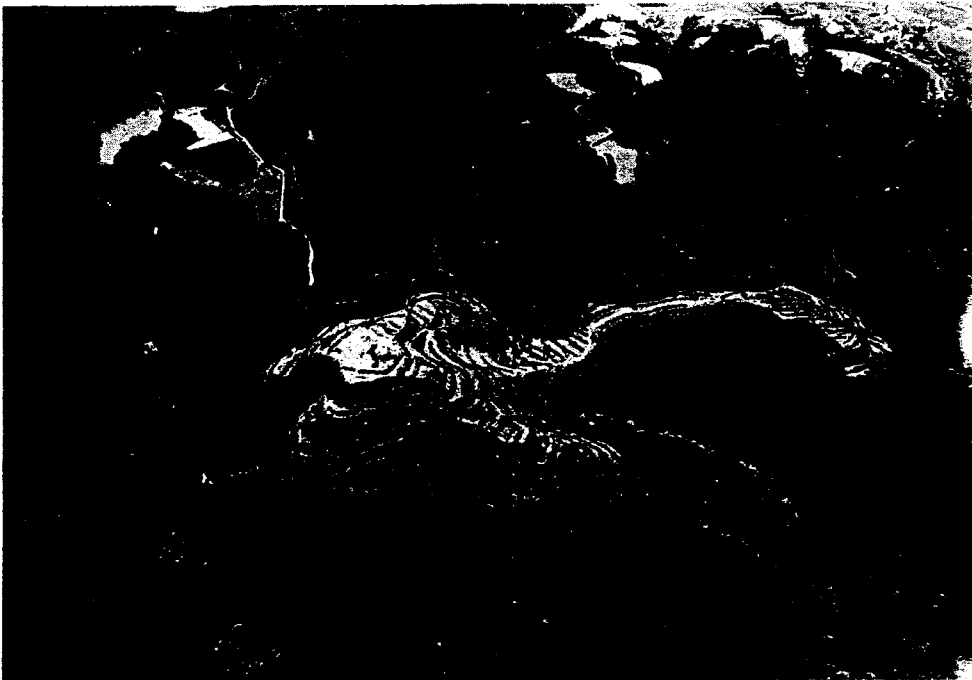
神楽尾山は津山市街地の北西部に位置しており、標高は308mで、南東麓の美作国府からの比高が約200mある。城跡は山頂部を中心に放射状に築かれているが、はっきりとした築造年代は不明である。

ただ『太平記』に「山名伊豆守三千余騎を率ひ、二手に分て（中略）赤松筑前守入道世貞、同律師則祐が所々の城を責むるに（中略）神楽尾城等第一ヶ（に）もせず」とあるので、すでに南北朝時代には築城されていたことがわかる。

天文7年（1538）、尼子氏に属する原田播磨守忠長が城主山名右京太夫氏兼を攻撃している。天正7年（1579）には、宇喜多氏の武将花房職之（はなむら）が、当時毛利氏に属していた神楽尾城（城将は大蔵甚兵衛尉尚清・千場三郎三衛門）を陥落させている。

縄張りは、山頂を中心に本丸が広がり、その南東の二の丸、本丸尾根状の三の丸、そして本丸と三の丸をつなぐ馬場・武者溜まりからなっている。本丸・三の丸は下草がすべて刈り取られ、当時の山城様子が見学できるように整備されている。

（詳しくは次ページの『日本城郭大系』参照）



神楽尾城

①津山市神社 ②平家城 ③正平年間(一三四六〜一七〇)以前 ④宇都宮教員 ⑤山城 ⑥曲輪・土塁・堀切 ⑦三三〇m×四四〇m、標高三〇八m、比高一七〇m ⑧—— ⑨『美作古城史』、『美作略史』

神楽尾城のあった神楽尾山は、現在の津山市街地の北西部に位置している。

標高は三〇八mで、南東麓の美作国府跡からの比高が二〇〇mであり、山上を中心に神楽尾城跡がある。この城はちょうど美作国の中央にあり、東は津山盆地、西は狭い田邑盆地に挟まれた南北方向に広がる山塊を利用して築かれている。城のすぐ南は田邑街道と呼ばれる道の峠に当たり、これは国府のあった現在の津山市総社から田邑・鏡野方面へ抜ける道であった。また麓には戸川宿があった。神楽尾という名は、昔、山上に天劍神社があり、毎夜神楽の響きが聞こえたことからつけられたという。

この城の築城年代は不明であるが、正平十七年頃(貞治年間、一三六二〜一三八)に宇都宮教員が在城したといわれる。また一説には、承平年間(九三一〜一三八)に築城したといわれるが、史実はない。

下って天文元年(一五三二)に尼子経久が美作に攻め入り、東作の諸城を降したが、この頃、神楽尾城は山名右京太夫氏兼が守っていた。天文七年(一五三八)には尼子氏側に降った稲荷山城(中央町)の原田播磨守忠長が攻め、落城した。城主山名氏兼は敗れて一宮村に退いた。しかし、天文十二年(一五四三)に山名氏が反撃して稲荷山城を落とし、原田忠長を討ち取った。

時は移り、永禄九年(一五六六)に尼子氏の本拠地出雲の富田城は毛利氏の軍門に降った。このため美作地方の諸城はそれぞれ毛利氏・宇喜多氏・浦上氏の配下に属することとなる。

神楽尾城は毛利氏の配下に属し、その将大蔵甚兵衛尉尚清と千場三郎三衛門が居城した。このため備前の宇喜多直家は、対岸の荒神山城に部将花房職秀を置いて毛利氏の諸城に備えた。ところが、天正三年(一五七五)に毛利氏・浦上氏・宇喜多氏は一時和平を結ぶ。が、同六年(一五七八)、羽柴(豊臣)秀吉の中国進攻の作戦に伴い、宇喜多氏の態度に変化が起った。神楽尾城内でも大蔵甚

兵衛と副将千場三郎三衛門が対立し、千場氏はひそかに城外に逃げたが、土井四郎次郎の追撃に遭って、下田邑迫戸で討ち取られた。

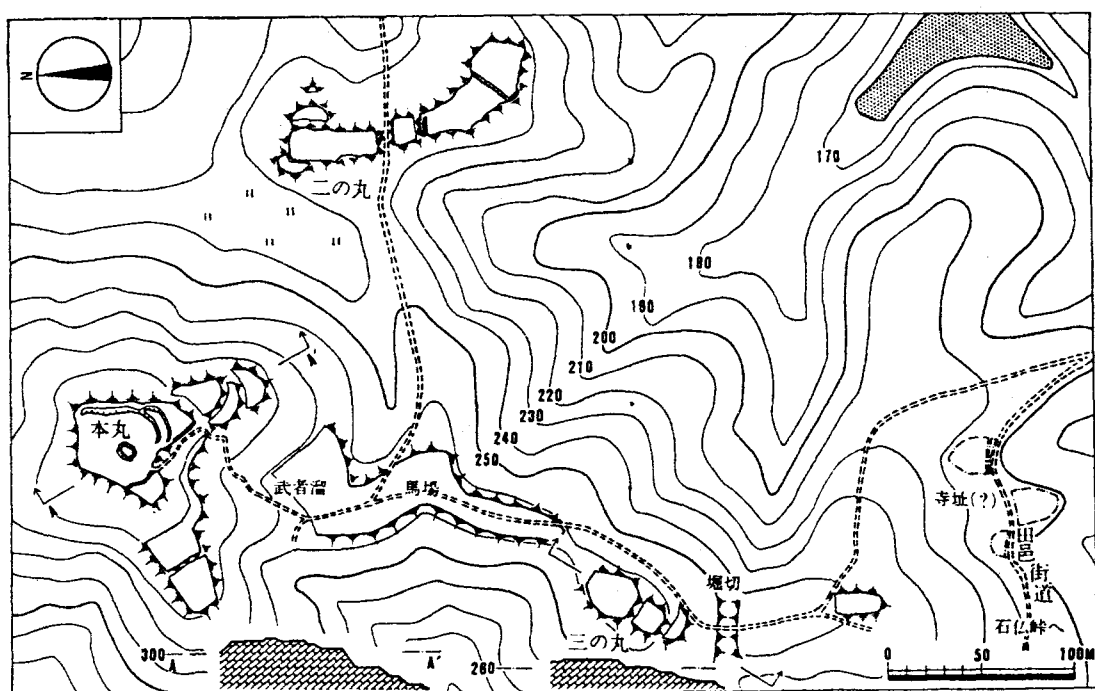
天正七年(一五七九)に毛利氏は宇喜多氏が秀吉側についたため、荒神山城の攻撃を準備することになる。ところが、これが花房氏側に放ってあった間諜によって事前に察知され、夜襲を決行した神楽尾方は敗退し、ついに神楽尾城も落城したのである。

神楽尾城は山頂を中心にした本丸、その南東の二の丸、本丸の南の尾根上にある三の丸、そして本丸と三の丸をつなぐ馬場・武者溜りからなる。

本丸は南北約四五m×東西約四〇mの不正方形を呈する。その真ん中に南北六m×東西五mで二mばかりの高さを持つ段郭が築かれている。また本丸を中心にして南東方向に五つの曲輪と南西方向に三つのかなり広い曲輪がある。南東方向については、本丸から数えて二番目の曲輪までは本丸と連結しており、その南西端は高さ一m弱の土塁が長さ一五mにわたって残存している。またそれより下に位置する三つの曲輪はそれぞれ独立した形をとっている。本丸の南



作州神楽尾古城図(池田家文庫蔵)



神楽尾城要図(S=1:4000)

西方向には本丸より一m下った所に一段曲輪郭がみられ、またその十数m下にはほぼ二五m四方の曲輪が二段にわたって存在する。その上段の曲輪は東端から幅一〇m内外の帯曲輪となって本丸の南東にある曲輪とつながるように延びている。本丸から北にも尾根が延びており、幾つか曲輪があるようだが、図示しえなかった。

本丸から南に山道を五〇mばかり下ると、南北四〇m×東西五〇mの武者溜りと呼ばれる広い平坦地に出る。それからさらに南の方向の尾根上に一五―二〇mの幅の馬場と称する平坦地が続き、その長さは約一三〇mある。

馬場の先端から二五mばかり南に三の丸がある。三の丸は三段の曲輪からなり、北の曲輪が一番広い。三の丸の先には尾根を切断するように上幅約一〇mの堀切があり、その五〇m南にも南北二五m、東西一二mの平坦地がある。

その三の丸の先の平坦地から尾根上の道を南に二〇〇mばかり行くと、田邑街道に出る。その田邑街道沿いに寺の跡といわれる平坦地が三つに分かれて存在する。瓦片・礎石などは見当たらず、真偽は不明である。

二の丸といわれている所は、馬場から約一六〇mばかり東に向かうと、その山道の両側に七つの曲輪が存在する。山道より北には南北四七m、東西一七mの長方形の曲輪を中心にして他の三つの曲輪をそれより下に備える。また道より南は南北一二m×東西一五mの曲輪と、それより広い二段の曲輪がある。南の方が一mばかり低い。その二つの曲輪の北と南西端に一部土塁が残存する。この城はその規模・構造において、美作有数の中世山城であるといえよう。

★徳守神社 (とくもりじんじゃ)

津山市宮脇町にあるもと県社。現在は宮川以西の津山市旧市街の氏神である。祭神は天照大日靈命（あまてらすおおひるのみこと）。

社記によると、天平時代（729~749）の勧請といわれる。天文8年（1539）社殿が焼失。慶長9年（1604）森忠政が津山城築城の「手斧始（ちょうはじめ）」として社殿を造営し、津山城下の総鎮守とした。寛文4年（1664）藩主森長継の命により現社殿（県重要文化財）に改築された。中世には「勅使の宮」と称された。その理由は、出雲への勅使清閑寺大納言徳守を祭祀したからだと伝えられる。また、『昨陽志』には「富川村徳守大明神」と記されており、中世の「富川宿」の鎮守であったことがわかっている。

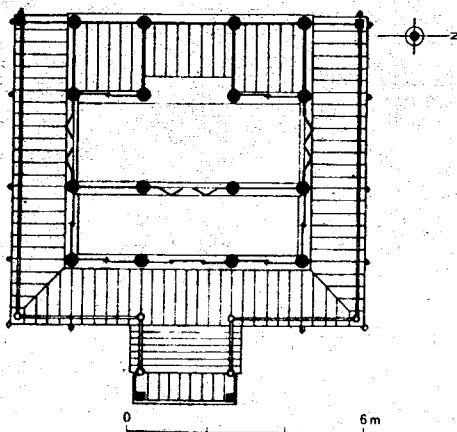
★徳守神社社殿 (とくもりじんじゃしゃでん)

昭和31年（1956）岡山県指定重要文化財。本殿・拝殿・幣殿の3棟が指定建造物になっている。現在の社殿は寛文4年（1664）森長継の命で再建されたものである。桃山時代の建築様式をもつ中山造で、江戸時代初期の優秀な建造物である。

本殿は桁行3間、梁間3間、単層、入母屋造、妻入、銅板葺（元は檜皮葺）、正面には1間の唐破風の向拝を付けている。柱は総円柱であり、妻飾は二重紅梁大瓶束式、軒は二重繁杵、基股の彫刻や籠彫にした草花の木鼻などで見事に装飾している。組物は和様の二手先で、組物の間から象鼻化した尾杵や丸彫りにした象鼻を出している。基礎は基壇上に亀腹を設けている。

拝殿は、桁行6間、梁間3間、入母屋造、銅板葺、正面は唐破風造、向拝付き。幣殿は、桁行1間半、梁間5間、両翼突出部付、切妻造、銅板葺である。

徳守神社社殿平面図



▼徳守神社

寛文4年（1664）に森長継が再建した。城下の総鎮守として独特の位置をしめていた。（県重文）



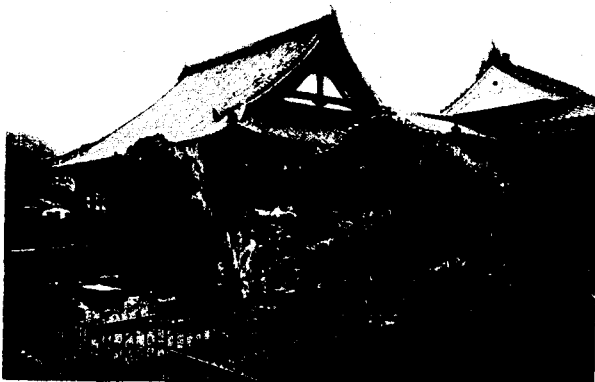
★泰安寺（たいあんじ）

津山市西今町にある浄土宗の寺院。山号は天崇山。本山は京都知恩院である。美濃国涅槃寺住職報蓮社源誓が津山藩主森忠政の入封に従って美濃国金山から入り、創建した寺院である。はじめ覚王山涅槃寺と称したが、森氏断絶後、松平氏の菩提寺となってから浄光山泰安寺、次いで天崇山泰安寺と改めた。本源寺・妙法寺とともに「津山三カ寺」と称され、数ある津山の諸寺の中でも抜きん出た存在であった。瓦には葵紋が入っており、松平氏の菩提寺であることを示している。

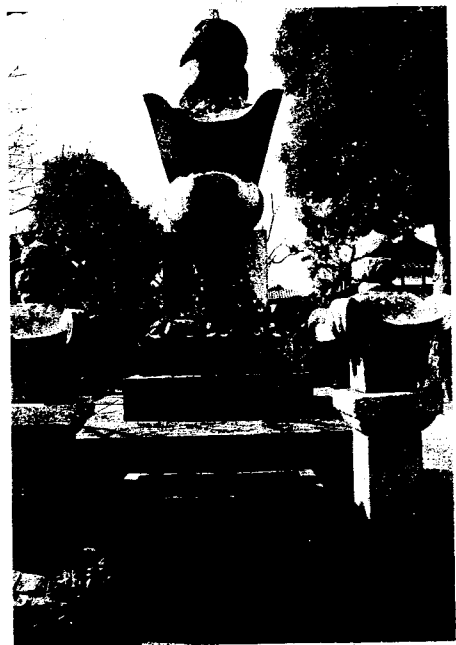
かつては山門までの長い参道に見事な松並木があり、殿様が籠で参詣したという。しかし、この松並木は戦時中の松根油の採取で切り倒されてしまい、残っていない。

現在、位牌が置かれている御霊屋と初代藩主宣富（のぶとみ）の巨大な五輪塔が本堂西側にあり、北側には七代斉孝の六角石塔の墓がある。不思議なことに泰安寺には初代と7代の墓しかなく、寺でもその理由がわからないようである。なお、最後の藩主慶倫（けいりん）の墓は津山市山北八子の地藏院にあって「愛山墓所」と呼ばれ、津山市重要文化財になっている。

泰安寺にはもう1基「大吉様」呼ばれる大きな五輪塔がある。これは森家2代藩主長継の7男（7歳で夭折）のもので、その法号良洪院殿大吉に因んでいる。しかし、長継一門の墓は小田中宗永寺にあり、大吉様だけがなぜここにあるのかもよくわかっていない。



泰安寺本堂



大吉様の五輪墓所



み た ま や 御 霊 屋

松平氏の菩提寺として歴代の位牌をまつる御霊屋は寺の裏手にある。



松平家位牌

松平藩主9代までの位牌が御霊屋の左側にある。

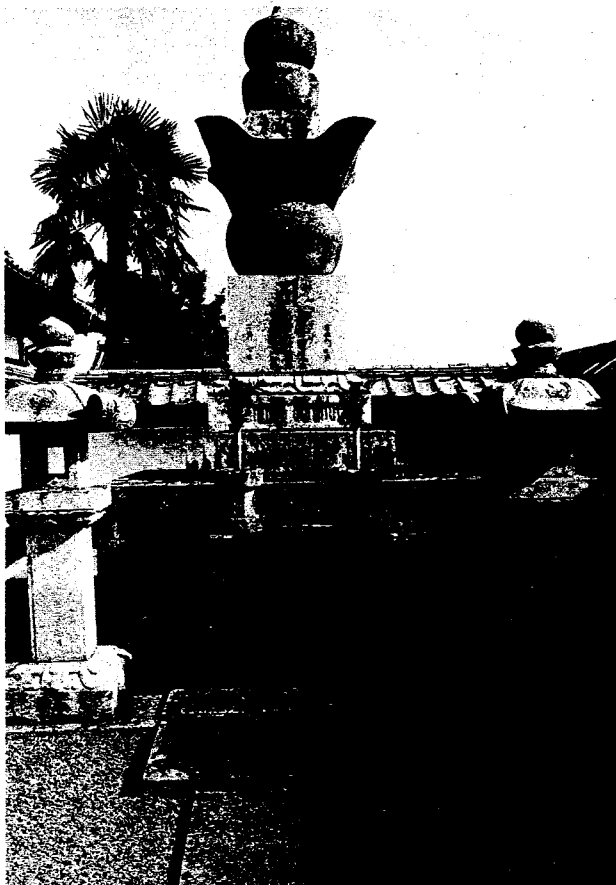
徳川家(宗家)の位牌は御霊屋の右側にある。



徳川家(宗家)の位牌

御霊屋の右側に徳川家(宗家)の8代まで位牌がある。

1代家康・2代秀忠
・3代家光・4代家綱
・5代綱吉・6代家宣
・7代家継・8代吉宗
の位牌がある。

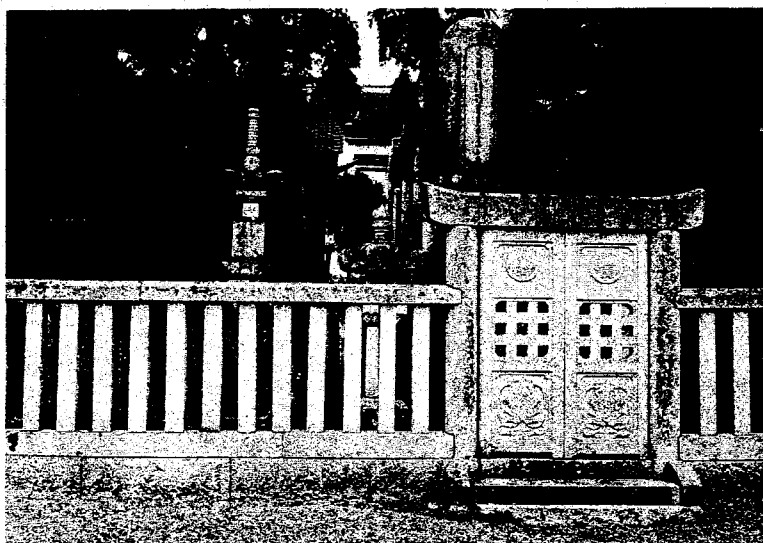


のぶとみ
松平宣富(初代)の墓所

歴代の位牌をまつる御霊屋はあるが、墓はなぜか初代の宣富と7代斉孝の石塔だけである。

宣富の墓所は本堂の左手の奥に西向き五輪塔がたてられている。

松平斉孝(第7代)の墓所 六角石塔の基で葵の紋を刻んだ石の扉で囲んでいる。山内の裏庭の北側で南向きにたてられている。



★成道寺 (じょうどうじ)

津山市西今町にある浄土宗の寺院。山号は転法輪山。本尊は阿弥陀如来。もとは「九品山来迎寺照源院」と称した。慶長9年(1604)、津山藩主森忠政の命により美濃国金山から報蓮社源譽を招いて開基し、寺号も金山の旧号を用いたと伝えられる。

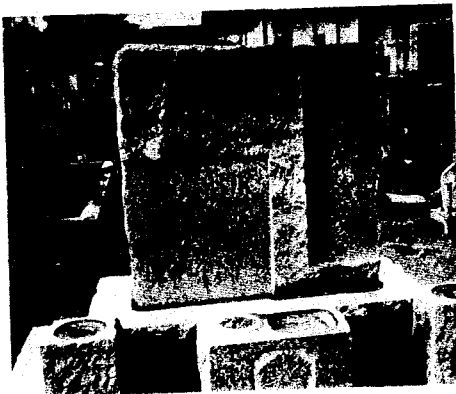
森氏断絶後は、松平藩重臣の菩提寺として栄えたが、しばしば火災にあったため宝暦3年(1753)現在の寺号に改称した。これは寺号の「照」が「焼」、「来」が「雷」に通じ、火事を招き、雷を招く寺に通じ不吉だとされたからである。

山門は明治時代の置かれた北条県庁舎の門を移築しており、門に番小屋が敷設されているところが珍しく、津山市の重要文化財に指定されている。

また、この寺には俳人西東三鬼の墓があることでも知られている。高さ1.7mの衝立形の御影石の右肩に「西東三鬼之墓」と刻み、左は下部を色紙状にして、代表句の一つ「水枕 かばりと寒い 海がある」が刻まれている。



成道寺の山門

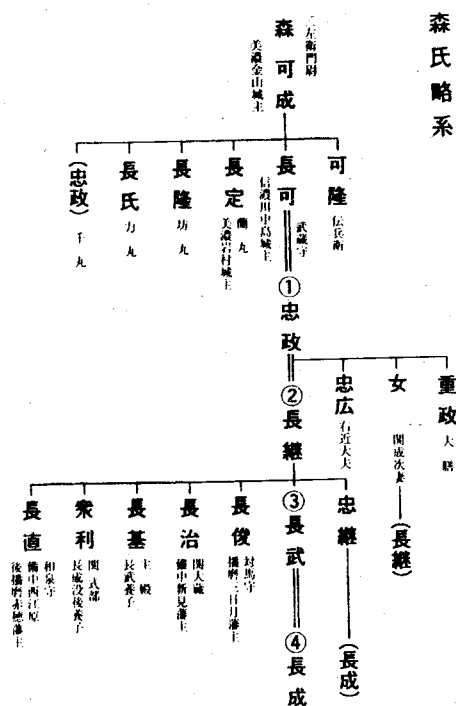


西東三鬼の墓

★本源寺 (ほんげんじ)

津山市西今町にある臨済宗妙心寺派の寺院。山号は東海山。もと美作国の安国寺で、苫西郡神戸村（現津山市院庄）にあり、萬松山と称した。慶長9年(1604)、津山藩主森忠政が小田中村（現津山市小田中）に移し、僧海晏(かいあん)を当寺中興の祖とした。さらに慶長12年(1607)忠政の夫人於岩(おろ)を葬るため現在地に移し、龍雲寺と改称し、森家の菩提寺とした。僧天倫の時、東海山と今の山号に改めた。その後、天和3年(1683)、僧夢堂が忠政の50回忌を営むに当たって忠政の院号「本源院」にちなみ本源寺と改称した。

本堂西側には、森家代々の位牌を安置する御霊屋があり、その背後に森忠政の五輪塔を始めとして6基五輪塔が一行に並んでいる。台座から高さは優に3mは越える。向かって左から二番目のものが森忠政の五輪塔で、正室於岩のものはその左隣、列から離れている1基は江戸で死んだ忠政の娘のものである。近世の代表的な大名墓として津山市重要文化財となっている。



森家大名墓

【参考】森忠政（もりただまさ）

元龜元年（1570）～寛永11年（1634）

津山藩初代藩主。父は森三左衛門尉可成（もりさんざえもんのかなり）、母は林新右衛門通安（はやしんえもんみちやす、常照）の娘、のち妙向尼と称した。六男。幼名は千丸・千代助。長じて忠重・一重と称した。天正10年（1582）織田信長に仕える。同年本能寺の変で兄蘭丸（長定）・坊丸（長隆）・力丸（長氏）を失った。

天正12年（1584）、長兄長可（ながよし）が長久手の戦いで戦死した後、美濃国金山7万石を領した。翌年、従五位下右近丞、天正15年（1587）従四位下侍従。この時忠政と改名し、「金山侍従」とも称された。

豊臣秀吉に従って九州島津攻め、相模小田原攻め、文禄の役では肥前名護屋へ出兵した。秀吉の没後、徳川家康に接近し、慶長5年（1600）2月信濃中島で13万7500石を領し、海津城主となった。慶長8年（1603）2月、徳川秀忠より美作国一円18万6500石を与えられ、津山城を築き、美作の国守となった。慶長17年（1612）伯父可政を津山を引き取り、執権とした。

寛永3年（1626）従四位上、左近衛権中將。寛永11年（1634）家光上洛に伺候するため入京中、食中毒のため逝去。法名は「本源院殿前作州国主羽林中郎將先翁宗進大居士」、夫人は摂津茨木城主中川瀬兵衛の娘。後添えは名古屋因幡守の娘で豊臣秀長の養女である。

【参考】津山藩森氏（つやまはんもりし）

津山藩森氏の先祖は源義家の6男義隆に始まる。子孫は信濃・美濃あたりに盤踞し、室町時代には美濃守護土岐氏の被官であったと伝えられる。

中興の祖は森三左右衛門可成（かなり）である。幼名は満、のち与三。土岐氏滅亡後、一時斎藤道三に身を寄せ、のち織田信長に仕えた。桶狭間の戦いで戦功をあげ永禄8年（1665）美濃国金山城主となる。元龜元年（1570）、越前手筒山の戦いで長男可隆（かしたか）戦死、同年9月、浅井・朝倉との決戦では、近江国坂本で可成も戦死した。享年48歳。

2代長可（ながよし）は可成の2男で、通称勝蔵・長一と称し、官位は武蔵守。武勇の士であったため「鬼武蔵」と称された。天正10年（1582）、北信濃4郡を領し、川中島の海津城に入った。織田信長の死後は羽柴秀吉に属し、天正12年（1584）尾張国長久手の戦いにおいて27歳で戦死した。3代が前項の忠政で、津山藩初代となる。

津山藩2代は、長男重政は早世、嗣子忠広も30歳で没したため、忠政の外孫である長継が継いだ。寛永17年（1640）従四位下侍従。承応元

年(1652)実弟関長政を立て支藩とし、長継の15子長治を嗣子とした。これが後の備中新見藩となる。延宝2年(1674)隠居し、国内2万石を領した。延宝4年(1676)には6男長俊を立て支藩としたが、これが後の播磨三日月藩となる。元禄11年(1698)89歳で没した。森宗家断絶後は備中西江原に移り、11男森長直(ながたけ)を嗣子とした。これが備中江原藩となるが、長直は後に播州赤穂に移封となった。

3代は長武(ながたけ)で、長継の3男である。幼名は兵蔵、はじめ長義と称した。長継の嫡子が早世し、その長子長成(万右衛門)が幼少であったため、その成人になるまで藩主とされた。万治2年(1674)封を継ぐ。貞享3年(1686)、長成が成人したため隠居。隠居料2万石。

4代長成は寛文11年(1671)生まれ。長継の長男、忠継の長男。幼名は兵三郎・万右衛門。貞享3年(1686)封を継ぐ。従四位下、のち侍従。支藩の関長政が後見役となった。元禄10年(1697)6月27歳で没。子がなかったため家老職についていた長継の11男関式部衆利(むしき)を立てようとしたが、江戸へ向かう途中伊勢国で発狂。そのため森宗家は断絶した。幕府は長継へ隠居料2万石を与え、かつ支藩の存続を許した。

【参考】津山藩松平氏(つやまはんまつだいらし)

津山藩主。姓は源、氏は松平、三葉葵を家紋とする。徳川家康の二男秀康を祖とする。初代秀康(浄光公)は天正17年(1589)、下野国の結城晴朝の養子となり、結城秀康と称する。慶長5年(1600)関ヶ原合戦後、越前国75万石を領した。慶長13年(1608)34歳で没する。

2代忠直(西厳公)が封を継いだ。元禄9年(1623)領地を没収され、豊後国に流され、慶安3年(1650)56歳で没した。

3代は光長(恵照公)で、徳川名家の存続を図った幕府の配慮によって寛永元年(1624)越後国に25万石を与えられた。しかし、越後騒動により再び領地を没収され、伊予国松山へ流された。のち江戸の柳原邸に帰り、3万俵を給せられた。宝永4年(1707)93歳で没。

4代(津山藩松平氏としては初代)は宣富(のぶとみ、源泉公)。武蔵国川越の松平直矩の第3子で、元禄6年(1693)光長の養子となる。元禄11年(1698)美作国内で10万石を与えられ、津山藩主となった。以下5代浅五郎(智円公、11歳で夭折)、6代長熙(戒善公)・7代長孝(隆照公)・8代康哉(やすしか、顕徳公)・9代康父(やすちち、厳恭公)・10代斉孝(成裕公)と続く。

斉孝に嗣子がなかったため將軍家斉の第16子が養子として迎えられ、11代斉民(文定公)となった。12代慶倫(よしとも、慎由公)のとき明治維新を迎える。版籍奉還後、津山藩判事となった。

